

## 「正しく人を愛する六原則」(2)

出エジプト記 20章1～17節

～モーセの生涯(10)～

## はじめに

今回は、モーセの生涯の10回目です。神は、神の民に十の戒めをお与えになりました。それは二つの部分に分けられていました。一部は「正しく神を礼拝する四原則」で、二部は「正しく人を愛する六原則」です。一部は神への礼拝、二部は人の道徳です。真の道徳は、真の礼拝から生まれるというのが、聖書の教えです。

今回は、二部の中から、「姦淫してはならない」と、「盗んではならない」の二つを学びましょう。

## 1 姦淫してはならない。

正しく人を愛する第三の原則は、「姦淫してはならない」です。これは「結婚と性」についてに戒めです。

## (1) 神の定めた結婚と性(創世記 2:18-25)。

聖書によると結婚は神が定めたものであることが分かります。神様は「人が、ひとりであるのはよくない。わたしは彼のために、ふさわしい助け手を造ろう」とおっしゃって、アダムにエバをお与えになり、ふたりは結婚しました。そして、彼らが一つとなるため、また子どもを産むために、性をお与えになりました。神様は、「結婚がすべての人の間で尊ばれる」ことを求めておいでになります(ハブル 1:4)。

## (2) 独身生活。

結婚が神の定めだとすると、独身はだめなのでしょうか。イエス様は独身についてこう教えられました。「そのことばは、だれもが受け入れられるわけではありません。ただ、それが許されている人だけができるのです。

母の胎から独身者として生まれた人たちがいます。また、人から独身者にさせられた人がいます。また、天の御国のために、自分から独身者になった人たちもいます。それを受け入れることができる人は、受け入れなさい」(マタイ 19:11-12)。

「母の胎内から」とは、病気、障害など、不可抗力なこと。

「人から」とは、離婚、死別など。

「御国のため」とは、神のために自分から独身を選ぶこと。

イエス様、バプテスマのヨハネ、使徒パウロなど。

### (3) 結婚以外の性関係。

さて、十戒では「姦淫してはならない」と教えています。「姦淫」とは、結婚生活以外の性的関係です。先ほどのヘブル人への手紙 13 章 4 節の続きはこうです。「寝床が汚されることのないようにしなさい。神は淫行を行う者と姦淫を行う者をさばかれるからです」とあります。「淫行」と「姦淫」を行う者をさばくと言われます。「淫行」とは、結婚以前の性行為、「姦淫」は結婚中の他人との性行為です。

**適用：**日本は、聖書の教えが基本的になかったので、性については非常にあいまいであると言われます。不倫や若者の性行為があたりまえのように言われます。しかし、それらは肉の欲を満たすだけに過ぎず、人の心を満たす本当の愛の行為とは言えません。「愛しているのだから」と言って行為を求めることは、本当の愛ではありません。

### (4) 心の中での姦淫。

イエス様の教えは、人間の行いだけでなく、心の中にまで及んでいます。こう言われました。「姦淫してはならないと言われているのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。情欲を抱いて女を見る者はだれでも、心の中ですでに姦淫を犯したのです」（マタイ 5:27-28）。

このように厳しく教えられたイエス様こそ、乱れた性生活を救う唯一の方です。

## 2. 盗んではならない。

正しく人を愛する第八の原則は、「盗んではならない」です。この戒めは、人間の経済生活に関するものです。

### (1) すべてのものの所有者は神です（詩篇 24:1）。

聖書は、すべてのものの創造者であり、所有者は神であると教えています。人間は、神がお造りになった物を管理するために働くのです。

### (2) 働くことの意味。

人間は神様に代わって、神様のものを管理するのです。これが「働く意義」です。自分のため、家族のため、社会のために働くことは、当然のことであり、神様の定めです。

ですから、「働く究極の目的」は、「神の栄光」なのです。

**適用：**ウエストミンスター小教理問答書ではこう教えています。「第八戒は、私たち自身と他の人々との生活状態を、合法的に確保し、向上させることを求めている」。

今日、残念なことに、人々を出来るだけ安い賃金で働かせようとして非正規雇用が増えていると言われます。貧しい生活を強いられる人々が多くなります。今こそ、雇用者は「盗んではならない」という神のことばに耳を傾けるべきです。

### (3) 神のものを神に (マタイ 3:8)。

イエス様は、税金をカイサル（ローマ皇帝）に納めるべきかと尋ねられたとき、こう答えられました。「カイザルのものはカイサルに、神のものは神に返しなさい」(マタイ 22:21)。

カイサルに納めるのは税金ですが、神に返すのは献金です。教会で行われる献金は、神のものを神に返すことなのです。

神様は、私たちに必要なすべてのものをお与えになってくださいますが、その中には、直接「神のもの」と言われるものが含まれています。神様は昔イスラエルの民にこう言われました。「地の十分の一は、地の産物であれ木の実であれ、すべて主のものである。それは主の聖なるものである」(レビ 27:30)。

しかし、この教えはが守られない時代が来ました。そこで神様は民に「あなたがたはわたしのものを盗んでいる」と言われました。民は答えました。「どのようにして私たちはあなたのものを盗んだのでしょうか」。神様は言われました。「十分の一と奉納物においてだ。あなたがたはわたしのものを盗んでいる」と。

「盗んではならない」という戒めは、人のものを盗んではならないだけでなく、神のものも盗んではならないと教えているのです。

**適用：**十分の一献金について分かりやすくお話しします。ある人が一万円の収入の中から一千円献げました。ある人は百万の収入から十万円献金しました。人々は十万円献げた人を見て素晴らしい信仰だといえます。しかし、どちらが多く献金したかは明らかです。一万円の人には残りは九千円です。しかし、百万円の人には残りが九十万円もあるのですから。ですから、献金は額ではなく、その人の神様への愛のあかしです。

聖書はこう教えています。「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だからです。ある人は金を追い求めたために、信仰から迷い出て、非常な苦痛をもって自分を刺し通しました」(1テモテ 6:10)。

## 結論

神様は、人々が正しく人を愛する原則をお示しになりました。その第七戒が「姦淫してはならない」で、第八戒が「盗んではならない」でした。

神様はこのことを人々に求めましたが、人々は守れませんでした。神様に罪を犯し続けたのです。このままでは滅びるほかはありません。

そこで、神様は、最終的に救い主イエス・キリストを世にお遣わしになり、十字架で私たちの罪の身代わりとして罰されたのです。

だからといって、私たちはこの神の戒めを守らなくてもいいということにはなりません。私たちが本当に幸せになるためにも、人間関係をよくして行くためにも、この世の悪をただして行くためにも、この戒めを守る必要があるのです。

### 救い主として受け入れていない人への勧め。

あなたは、今日までイエス様を知らなかったかもしれません。しかし、イエス様はあたを知っておられます。今日、今、イエス様のもとに帰っていらっしやい。イエス様は、それを望んでおられます。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」

(黙示録 2:20)

「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」  
(使徒の働き 16:31)

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」(ヨハネ 3:16)